

おり さかな
檻の魚

みさか たくろう
見坂 卓郎

祖父の白い影を追って歩く。

暗く長い堤防の上、懐中電灯に照らされた背中はひどく痩せて弱々しかった。髪も肌も着ている服も真っ白な祖父は身体が透き通っているように見え、どこか幽霊めいたものを思わせる。

夏の潮風は身体にまとわりつくように生ぬるい。前に行く祖父は、体感で言うと一メートル進むのに三十秒ほどかけながら、すり足みたいに歩いている。夜明け前の空を映したように黒ずんだ海は、近隣からの廃水のためかドブに似た臭いがした。

ポチャン、と何かが跳ねる音がして浩一は足をとめた。音がしたあたりに目を凝らしてみると、ぼんやりと闇が広がっているだけだった。そこには何も無い。認識できないなら、それは「ない」と同じだ。

浩一はまた前を向く。

眠気のせいか頭が重い。身体がまだ覚醒していない感覚があり、堤防をなぞる足が雲を踏むようにあやふやだ。濃い潮の香りが鼻をついた。古びた堤防にはあちこち亀裂が走っているので、なるべく真ん中あたりを歩くようにする。

祖父の背中に目をやると、消波ブロック一つ分くらいしか進んでいなかった。家から海までは目と鼻の先の距離なのに、祖父の足だと気の遠くなるような時間がかかる。二人をあざ笑うかのごとく黒いフナムシが足下をすり抜けた。

このまま置いて帰ろうか。そんな作戦を考えたことは何度もある。祖父以外は困らないし、もしかすると祖父もそれを望んでいる可能性がある。ただ、実行するための勇気を持ち合わせてはいなかった。

浩一はため息をつき尻のポケットからスマートフォンを取り出した。暗闇の中に明るい

画面が浮かび上がる。こんな朝早くにメッセ
ージを寄越す友達など一人もいない。

祖父と釣りに出かけるのは家族ぐるみの芝
居みたいなものだった。中学三年の浩一から
見ても家に祖父の居場所がないのはあきらま
らで、かといって追い出す正当な理由もない。
浩一に与えられたのは、家の外に祖父の居場
所を用意するためのアリバイ作りにも似た役
割だった。

芝居の糸を引いているのは母だ。母に逆ら
えば浩一まで居場所を失ってしまう。母への
服従は、いわば生存戦略に等しいものだった。
浩一だけでなく、おそらく祖父も与えられた
台本を承知している。大根役者ばかりの芝居
がもう一年半ほど続いている。

浩一は中学に入っすぐ、いじめに遭った。

「臭い」

「きもちい」

「死ね」

小柄で痩せていて大人しい浩一は、いじめの標的として適任だったらしい。きつかけは些細なものであったはずだが、クラス中の悪意が渦を巻いて浩一に襲い掛かるようになった。小学校からの友達も、自己防衛のためかあっさり敵側にまわった。助けてくれるはずの若い担任は見て見ぬ振りをした。認識していなければ、ないのと同じなのだ。

浩一も、目の前の現象に「いじめ」という単語が当てはまるのかどうか自信がなかった。誰かにこれがいじめであると宣言してほしかった。放置し続けた担任の態度はおそらく、いじめそのものよりも残酷だった。

そのうち学校に行くのが怖くてたまらなくなった。登校時間が近づくと胃がきりきり痛んで部屋から出られなくなる。身体が震えて鳥肌が立つ。そのことを気に病んで落ち込む。そんな負の連鎖に陥った。食事が喉を通らなくなり、体重はさらに落ちた。

母もまた、息子が不登校であるという現実

を認識しなかった。

「いつになったら『まとも』になるん」

世間体を気にしてか、母は浩一が平日に外出するのを固く禁じた。『まとも』でない中学生が学校にも行かずふらふらしているのを、恥ずかしいと思ったのだろう。浩一自身にも、何とかしなければという気持ちはあった。ただ、母が『まとも』と口にするたびに呪詛じゆそのように身体が重くなった。

結局、学校には戻れなかった。島には中学が一つしかないので転校するあてもない。島に張りめぐらされた見えない檻が浩一の心身を縛りつけていた。

やがて毎週日曜日、病気の祖父に付き添って釣りに出かけるという役回りを与えられた。それは母や祖父のためだけでなく、浩一の存在意義を担保するためのアリバイ作りでもあった。それでも、何も知らない人が見れば、祖父孝行の孫だと思ふのかもしれない。

浩一の夢にはよく無人島が現れた。

それは何かのテレビ番組で紹介されたもので、番組名は忘れてしまったがその映像は頭にこびりついている。透き通った碧い海、白い砂浜、野生のシカやクジャク……。小さな無人島には本来の自然がそのままの形で残されていた。「自然の楽園」というフレーズで紹介され、たしかにそれは楽園と呼ぶべきものだった。

夢の中で浩一は浮遊感に包まれて空を舞い、鳥になり、魚になった。風になって緑に触れた。軽やかな潮の香りを胸いっぱい吸い込んだ。青碧せいへきのグラデーションをなす遠浅の海岸は、島と海とが一つに溶け合っている様を描き出していた。儂く小さなその空間には必要なものが揃っていた。

夢には兄も出てきた。生まれる前に亡くなったとされる兄は透明な魚となって浩一のすぐ前を泳いでいく。兄を兄として認識できるのは浩一だけで、夢の意識の中だけだ。彼が

得るはずの名前も「浩一」だった。浩一は自身の名前が兄を上書きしたのだと感じていた。兄が楽しげに泳ぐ姿にどこか救われた気持ちになり、彼が兄として生きている世界線を想像した。

そして暗い部屋で目を覚ましたとたん、浩一はのしかかる重力に打ちひしがれた。窓ガラス越しに耳障りな音がする。人々が生活している。布団で頭を隠しても床から振動として伝わってきた。

この島には人が多すぎる。

当然のように生きている人たちは、生きることを肯定しすぎている。皆で酸素を奪い合っているのだから息苦しくなるのは当然だ。

現実を追いつめられるたびに夢に無人島が出てきてその痛みを緩和した。浩一は波の一部となり海を揺蕩たゆたい、空を駆けた。

夢の中でこそ本来の自分として生きられている実感があった。現実世界に価値はなく、夢と夢とを繋ぐためにあるものだと思った。

祖母が病死すると事態はさらに悪化した。

自己主張の激しい母は頑固者の祖父と折り合いが悪く、たびたび火花を散らしていた。父と結婚する前から、もつと言えば母がまだ十代の頃から二人の仲は悪かったらしい。殴り合うことこそなかったが、とにかく顔を合わせるたびに言い合いが始まった。特に浩一の教育方針については互いに譲らず、母と祖父は何かにつけてことごとく揉めた。

長男と言う立場は、家にとっての看板みたいなものらしかった。母と祖父は看板が傷つくことを恐れている。低い建物しかない田舎の小島で、たいした家柄でもない看板にどれほどの価値があるというのか。時代に取り残されたような古臭い考えに縛られている姿は滑稽こっけいにも見えた。浩一という名前にこだわったのもおそらくそのためだろう。長男というアイコンだけが求められている。

「浩くんは、自分らしく生きてらええ」

そんな中でも祖母だけは浩一の味方をしてくれた。中学に行けなくなったとき、「心配せんでも、発明王エジソンだって学校行つてないんじゃないか」と伝記の一節を持ち出して母を落ち着かせた。エジソンはいじめられて不登校になったわけではないことを浩一は知っていた。

温和な祖母は家の中で緩衝材として機能していた。母と祖父の対立が本格的な炎上に至らなかったのは祖母のおかげと言って良い。祖母は家族の負の部分を一手に引き受け、最後は全身を癌におかされて亡くなった。良い人ほど早く亡くなる、というメカニズムを見せつけられた気がした。

祖母の葬式で浩一は初めて母の涙を見た。母に「泣く」という機能が備わっているのは想定外だった。そのショックで自分の涙はどこかに引っ込んでしまい、再び出てくることはなかった。可愛がってくれた祖母の葬式で涙を流せない自分のことをとんでもない裏切

り者のように感じた。

その場でさえも母と祖父はほとんど会話をしなかった。喧嘩を始めなかったただまだ良かったのかもしれない。親戚のおじさんによると、祖父が昔、祖母にひどいことをしたのがすべての発端らしかった。通夜振る舞いの席で口を滑らせたおじさんは、子供には重い話だと判断したのか急に真顔になり、それ以上のことになるかと口をつぐんだ。何か浩一の手の届かない場所に隠されていた。

祖母が亡くなると当然のように家の雰囲気は荒れた。それは堤防のない海に似ていた。母と祖父の間には渦を巻くような波風ばかりが立ち、家じゅうの酸素を吸い込んでいった。

何かの本で読んだ「冷戦」にも似ていた。そのたとえで言うと父は永世中立国だった。父は元々の性格に加えて婿養子という立場上、二人に割って入ることはできないらしかった。母と祖父の激しい気性はよく似ていたし、父と浩一の気弱な性格も悲しいほどよく似てい

た。

家の中に救いはなく、学校にも行けない。間違え探しみたいにして、家のあらゆる場所で祖母の不在が見つかった。祖母こそが堤防だったのだと思い知らされた。葬式で泣けなかったのは母のせいではなく、浩一自身が正しく悲しめていなかったのではないか。祖母の不在に行き当たるたびに新たな悲しみが生まれて浩一を苦しめた。

浩一は夢のトンネルから無人島に逃げ込み、心をそこに落ち着けた。自分を守るのも、守らないのも自分だ。無人島で自由に泳げるのは個体として存在するからで、人間から他者との関係性をすべて引き算できれば、残るものはきつと魚と同じなのだろう。

夜明け前の海は、潮の音がよく聞こえる。消波ブロックにぶつかった波が、ぽこん、とくぐもった音を立てて散った。生ぬるい風が全身をさわさわと撫でていく。足下で干から

びたカニが堤防にへばりついていて。死体といえども踏みつける感触を避けたく、浩一は足を横に少しずらして歩いた。

祖父は相変わらず亀のように堤防を進んでいる。ゼンマイ式のおもちやみたいにも見える。その細い背中を見つめながら、浩一はふと数年前のことを思い出した。当時はまだ祖父も元気だった。

「おい。何じゃあ、この薄味は」

祖父が夕食の味噌汁に文句をつけたのだ。始まった、と浩一は胃が縮みあがるのを感じた。

「あら。ちゃんとお出汁だしは出てますけど」母がわざとらしい口調で言う。「おかしいですねえ」おかしいのはお前の舌だと言わんばかりだ。食卓がぴりつと凍りつく。

母は実父である祖父に敬語を使う。それが心の距離をあらわしているようだった。

味噌汁に口をつけてみると、普段と同じ味に思えた。下手なリアクションは取れない。

口元の筋肉がひきつるのを感じた。それを気にするとさらにひきつってしまふ。浩一は誤魔化すように米粒をかきこんだ。

父は残業でいつも帰りが遅く、たとえ帰ってきたところで状況が変わるわけでもなかった。本当に残業なのか、ただ家に帰りたくないただけでどこかで時間を潰している可能性もあった。永世中立国としての父は、とにかく存在感を消すことに終始しているようだった。浩一も家の雰囲気が悪化するにつれて、このまま透明になりたいと考えることが多くなった。身体じゅうの分子がばらばらになって、誰にも気づかれぬまま空気と溶け合っただけでどこかに消える。そんな夢想をした。

浩一は中立の立場を貫いているつもりだったが、祖父にとっては味方として認識されているらしかった。祖母が亡くなって一人でいるのが寂しいのか、よく祖父の部屋に呼ばれるようになった。そのたびに小遣い、もしくは饅頭まんじゅうがもらえた。饅頭の賞味期限はたび

たび切れていた。母は祖父から何かもらうことを極端に嫌がっており、うっかり見つかる祖父もろとも怒られた。

夜中に呼ばれたときは湿布貼りを手伝わされた。祖父は日ごろから身体の節々が痛いと言っており、至るところに大量の湿布を貼っていた。背中はや白い画用紙みたいに塗りつぶされ、薄い皮膚の向こうに痛覚が張りめぐらされていることを想像させた。

その痛みを、ただの加齢によるものだと思っていた。

ある日、いつものように肩や腰の痛みを訴える祖父に湿布を貼っていると、その身体が小刻みに震えているのに気がついた。痛みのためか脂汗まで浮かんでいる。

「どうしたん」

不穏なものを感じて浩一が訊ねると、祖父は低い声でうう、と呻いた。動作がぎこちないのも気になっていた。老化のせいだと決めつけていたが、近くで見ると異様な動きに思

えた。筋肉そのものが硬く凝り固まって、まるでロボットみたくカクカクしている印象を受けた。

念のためにと出かけた病院で、祖父は《パーキンソン病》と診断された。深刻そうな顔で告げられたものの、浩一にはその意味するところが分からなかった。医師から急遽呼び出された母は無表情でうなずいただけだった。

そのまま祖父は検査入院となった。精密検査のため三日ほどかかるらしい。帰り道の母は終始険しい顔をしていて、話しかけることができなかった。

家に着いてスマートフォンで調べると、その耳慣れない病気は遺伝子が影響する可能性があるらしかった。母や、孫である自分にも遺伝するのだろうか。決定的な治療法のない難病。サイトには不吉なことばかりが記されていた。

それは、浩一にいつか来る“死”をまっすぐ突きつけた。祖母と同じように祖父や母も

いずれ死ぬ。自分も死ぬ。引きこもりのまま病気で筋肉が凝り固まって死ぬとしたら、まさに最悪の結末だと思った。

進行性の病気であるパーキンソン病は、日を追うごとに祖父の行動範囲を確実に狭めていった。

治る見込みのない片道切符。

その境遇に対する反発心からか、祖父は頻りに釣りに行きたがるようになった。息苦しい家から脱出したい気持ちもあっただろう。結果的には母の思惑通りになった。祖父の病気まで母が仕組んだこととは思わないが、そう考えても不自然ではない展開だった。

金銭的な負担がかからない点も好ましかった。祖父は竿もリールも年代物を使い続けていたし、かかるのは餌代くらいのものだ。祖父と母に一時の安らぎをあたえ、お金もかからず、体力維持のための運動にもなる釣りは最良の選択肢だと言えた。祖父も喜び、母も助かる。貧乏くじを引かされているのは浩一

だけだった。

こうしてアリバイ作りとしての釣りが始まった。

浩一にとって何よりつらいのは、朝が早いということだ。祖父は日の出前に釣りはじめることにこだわっていて、朝三時すぎには起きて準備を始める。成長期の浩一にとって、身体がもつとも休息を求めるタイミングで布団を抜け出さなければならぬのが何よりの苦行だった。

そんな早朝でもちゃんと釣り具屋は開いていた。釣り具屋が早く開くせいで祖父も早起きになり、すべての苦しみは釣り具屋から生まれているのではないかと思えた。

日の出が近い。

空は明るさを増して、堤防と海との境界がはっきり見えてきた。堤防の端にくちばしの長い鳥が数羽とまり、餌を探しているのか頭を左右に動かしている。

その様子を眺めていたとき——前を歩く祖父の背中が突然ぐらりと揺れた。強い潮風にあおられたらしい。堤防から転げ落ちそうになった祖父の身体を反射的に両手で支える。この程度の風でよろめくなんて、と驚いた。手で触れてみると、その身体はほとんど骨と皮しかない。つんと鼻が痺れるしびような湿布の匂いがした。数年前までの頑固じじいといった様子は見る影もない。

浩一はまた、ある晩の出来事を思い出した。中学校で浩一がいじめに遭っていると知った祖父は、夕食で食べていた串カツの串を振り回して言った。

「この串でそいつら全員の目ん玉を刺してこんかい」

酔っていたためか、怒鳴るような声だった。どこまで本気なのか分からない。そんな反撃ができるならとつくにやっているし、できないから今の状況がある。祖父の言葉は外野席から無責任なヤジを飛ばしているようなもの

だ。

もちろん、すぐに母と口論になった。「悪影響を与えるな」とか「男はそんな軟弱じゃいけん」とか互いの主張を押し出しただけのやり取りが続いた。問題があつて喧嘩をするというよりも、喧嘩をするために問題を探しているように思えた。

戦争を経験した祖父はいつものように大空襲の話繋がった。まともな食料は何もなく、海は焼けただれた死体で埋め尽くされていたのだと繰り返す。同じ話を聞くのは何度目だろう。爆弾の降ってこない現代に生きることが容易くて、うまくいかないのは根性がないだけだという安易な展開に持ち込み、母は大きくため息をついた。

あのときの勢いは祖父の身体からすっかり消えてしまった。今この堤防にいるのは、ただのくたびれた老人だった。手を出さなかつたら溺れ死んだかもしれない。手を下すまでもなく、爆弾も必要なくて、手を出さないこ

とで殺せてしまう。たった数年で祖父がこれほどまでに弱るとは思ってもみなかった。

祖父はまた、のそりのそりと歩きはじめた。何かに導かれるように一心不乱に進んでいく。やがて目的のポイントに着いたのか、たんに歩き疲れたのか分からぬまま、座り込んで竿の準備を始めた。鞆を開けて道具を取り出す動作の一つ一つがスローモーションみたいに見える。

小物入れをごそごそかき回したあと、「おい」とか細い声が出た。病気になる前から祖父は声まで小さくなった。

「これ、つけてくれんか……」

祖父が釣り針とミミズのような生物を持って寄越した。病気で手先が震えてうまく餌をつけられないらしい。手の中でうごめいている細長い生物に目をやる。祖父はそれを「ケビ」と呼ぶ。身体をくねらせながら口をぱくぱくさせる様子は、近くで見られないほど不気味だった。自分でつけられないのならせめ

てルアーにしてほしかった。気持ち悪さを感じつつ、なるべく手元を見ないようにしてケビの口に釣り針をつっこんだ。虫のごった体液が針をつたう。

祖父はそれを受け取ると、竿をしならせて、海に投げ込んだ。

——ポチャン。

鉛製のおもりが波の隙間に吸い込まれる。

祖父は竿を数度あおり、ゆっくりリールを巻いていく。細かい動きはできないが、竿を扱う様子はそれなりに手慣れたものを感じさせる。

祖父が初めて釣りをしたのはいつ頃だろう。きっと母はまだ生まれていなくて、祖父を取り巻く環境は大きく違ったはずだ。この海もまだ綺麗だったのかもしれない。生きるのが大変だった時代と、生きることが容易すぎる時代とではどちらが生きやすいことになるのだろうか。

ふと目の端に眩しきを感じた。

日の出だ。

太陽の際きわから放たれる鋭い光が、空と海に彩りを与える。雲一つない空を抜けて太陽がそのまま照り付けてくる。堤防の上は陽をさえぎる場所がないのがつらい。目が痛くなりそうなので浩一は視線を下に移した。海は相変わらずにごったまま陽光をにぶく照り返している。波に押されるようにしてラベルの剥がれたペットボトルがぶかぶか流れてきた。漂着するゴミは外国製が多い。

祖父は餌を引き上げてまた投げてを繰り返している。魚はいるらしく、何度か上げ下げすると餌がなくなった。そのたびに浩一が呼ばれ、新しいケビに付け替えた。

釣りを一人ではこなせないのに、祖父は自分だけがそこにいるような顔で海を見つめている。この時間が祖父には必要なのだろう。実際にはただ魚に餌をやっているに等しいので、見ているだけの浩一にとってはひたすら退屈な時間だった。スマートフォンを取り出

して画面をいじろうとするも、数分置きに圏外になって浩一を苛立たせた。

浩一は身体を起こし、背中を伸ばした。この堤防から島全体を一望することができる。見れば見るほどちっぽけな島だ。島の端にある岩場には赤い鳥居が建っており、周囲の緑色から浮いて存在感を放っている。漁業の神様を祀^{まつ}っているのだと誰かに聞いたことがある。周りの草木は綺麗に刈り揃えられていて、近隣住民が小まめに手入れする様子が窺えた。祖父の釣りは漁業とは呼べる規模ではないのでご利益はないだろう。年末年始に騒がしい祭りが開かれること以外は、浩一にとってもなじみのない神様だった。

島の風景は停滞しているようで少しずつ変化している。堤防から見るとあきらかに家の数が増えた。人が減っているはずなのに家が増えるという現象は不気味に思えた。消しゴムで消したように島の緑色が消え、人も消え、最後は空っぽの家だけが残るのだろうか。

浩一はまた無人島を思い浮かべた。

あの白い砂浜は自然のままであるかぎり永遠だ。人のいない島と、人のいた島では取り返しのつかない差が存在する。

本当にこの汚れた海はあの無人島まで繋がっているのだろうか。海のどこかに切り取り線があつて、無人島を包む澄んだ海とは別物だと考えるほうがしっくりきた。

浩一は熱を帯びた堤防に座り直し、また島を眺めた。人がいるかぎり島は変わり続ける。今まで見てきた景色と、これから見ることになる景色は違うのだろう、と浩一はぼんやり思った。

「浩一は釣り……やらんのか」

祖父が今さら気づいたようにいい、浩一は首を横に振った。

「分からんけえ、ええわ」

そう答えながら浩一は落ちている平たい石を拾うと、ひざを曲げて前傾姿勢になり、横向きの回転をかけて海に投げた。石は三回跳

ねて沈んだ。複数の波紋が広がって堤防の端に重なる様子を見つめる。

祖父の部屋から睡眠薬を拝借することを覚えてから、夜は気を失うみたいにぐっすり眠れるようになった。その代わり昼間にぼうつとすることが増えた。懲役のように繰り返される堤防と家との往復は、ただの作業にすぎない。楽しいことなど何もないので、ぼうつとしていけばやがて終わる。

現実感が希薄になるのは望ましかったが、深く眠りすぎると夢を見られなくなることは死活問題だった。浩一は薬を砕いて分量を変え、眠りの深さを調節した。それでも次第に量が増えていき、やがて現実も夢も失ってしまふのだろうと想像させた。

ふと祖父の持つ竿に目をやると、先端が大きくしなっていた。

「あ」

アタリだ。竿の先が鋭く曲がっている。かなりの大物と思われた。祖父はあわてた様子

もなく、あるいは病気で感情が麻痺しているのか、機械的に竿を上下に動かしてリールを巻きはじめた。潮風に吹き飛ばされるほど弱っている祖父の身体は、糸を巻くほどにじりじりと海に近づいていく。このまま海に放り出されたら溺れるだろう。死んだら魚の餌になるのだろうか。浩一は不穏なことを考えてから、両手で竿を支えた。

「すまんな……」

魚の引きは強く、二人がかりなのに腰から持っていかれそうな勢いがあった。この強さは何だ。二人揃って海に落ちるのは避けたい。浩一は消波ブロックの隙間につま先をねじ込んで懸命に踏ん張った。

魚は左右に弧を描きながら、それでも少しずつこちらに近づいているように思われた。リールに巻かれた糸が径を増していく。一方で、竿を支える祖父の力があきらかに弱くなった。浩一に任せて手を抜いたというよりも、体力の限界を迎えたらしかった。浩一ですら

支えきれないほどの重さなのだから、それは必然だった。リールを巻く速度も遅くなり、ついに動きが完全にとまった。細い腕が震えている。浩一は祖父の手を握りリールを巻いた。まるで枯れ枝を握っているみたいな感触だった。

びくん、と竿が急にしなり、糸が海中に引き込まれた。相手はまだ余力がありそうだ。細い竿はいつ折れてもおかしくない角度まで曲がっている。いったいどれほどの魚が食いついているのか。

糸がピンと張り詰め、リールを巻こうにもロックされたみたいに動かなくなった。仕方なく竿だけを上下に動かしていると、突然糸の張りがゆるんだ。反動で竿が大きく跳ねる。

「――逃がしたか」

祖父が舌打ちした。魚は逃げたのだろうか。軽くなった竿を振ってみる。祖父はほとんど役に立っていないので、責めるような視線が不快だった。

糸の先を目で追いかけていると、波の間から黒く巨大なものが飛び跳ねた。それが魚だと気づくまでに少し時間がかかった。

「ありやあ……チヌか！」

祖父は興奮したのか、めずらしく大きな声を出した。チヌ——すなわちクロダイだとすると、その巨大さは異常だった。遠目に見ても一メートル近くはありそうだ。

陽の光を浴びて身体がきらきらと銀色に輝く。クロダイという名でも海のごった黒さとは違い、高貴さを身にまといている。こんな海に棲むべき存在ではないと思えた。

浩一は海沿いの定食屋で見かけた巨大な魚拓を思い出した。店長が釣り上げたとされるその魚の大きさは空想じみていて、話題作りのために手で描いたニセモノだと思っていた。

目の前にいるのはそれよりもさらに大きな魚だった。魚拓にしたら映えるだろう。店長が釣ったあの魚もじつは本物だったのかもしれない。たしかあの店は店長が腰を痛めてか

ら長く休業しているはずだった。島はせまいので良い話も悪い話もすぐに共有されてしまう。年を取ると身体の自由がきかなくなるのは誰しも同じなのだろう。店に行くことがなければ本物でもニセモノでもかまわない。

跳ねた魚が海にもぐると、再び竿に大きな手ごたえを感じた。

「うわ」

油断していた浩一は海に引きずり込まれそうになり、あわてて腰を落とした。針が外れたわけではないらしい。魚が大きく身を震わせるのが竿を通して伝わってきた。両手で強く竿を握り直す。祖父も同じ気持ちなのか、震える手に再び力がこもった。

「せえのっ」

魚の動きを捉えながら、糸のゆるむタイミングで一気にリールを巻く。魚と呼吸を合わせるような綿密な作業が続く。陽はとうに高く昇っていて、Tシャツの内側は汗でびっしょり濡れていた。

祖父と息を合わせて竿をあおる。ぐい、ぐいとこちらに近づいている手ごたえを感じた。体重をかけて、暴力的なまでの抵抗をさらなる暴力で覆っていく。弱い者が負けるだけのシンプルな綱引きだ。

魚との距離は徐々に近くなり、ついに数メートルのところまで迫った。魚の姿がはっきり見えた。近づいてみると、その大きさは想像を超えていた。こんな細い竿で支えているとは到底思えず、遠近法のくるったデッサンみたいだった。

浩一の目は魚だけを捉え、それ以外の背景は霞んでいった。まるで吸い込まれるように魚から目が離せなくなる。

頭の奥がじんとした。その感覚に浸りながら、ふと「釣られているのは自分のほうなんじゃないか」という気持ちが生じた。世界が逆さまになって、気を抜いたらそのまま海に引っ張り込まれてしまうような、恐怖にも似た感覚だった。

魚が泳いでいる。糸に引かれながら。泳いでいるのか、泳がされているのか。あるいは溺れているのか。

釣られているのはいったい誰なのか。

不気味さを振り払おうと、リールを巻くことに集中する。巨大な魚は糸に引かれるまま、ゆっくりと海面に浮かび上がってきた。

「よおし、よし……」

祖父がなだめるように言う。魚は手が届きそうなところまで迫っていた。網がないのでこのまま引き上げるしかない。鼓動が激しくなる。もう少し、あと少し――。

それは一瞬だった。

体力が尽きたと思われていた魚が、突然息を吹き返したように向きを変えた。尾びれで水面を叩くと水しぶきが上がり、反動で竿が大きくしなった。

その瞬間、プチンと何かが弾けるような音がして、竿の手ごたえが完全に失われた。後ろに体重をかけていた浩一は、バランスを崩

して堤防に手をついた。

魚との繋がりが絶たれたのは明白だった。
実にあっけない幕切れだ。

「くそう」

浩一の口から声が漏れた。その言葉を聞く
ことで、自分が悔しがっていることに気がつ
いた。そうやって悔しがっている自分の背後
に、すべてが予想された結末だったと諦めて
いる自分もいた。引き上げられた釣り針の先
には、輪ゴムの切れ端のようなものがぶらさ
がっていた。

「チヌの口か……ちぎれたか」

祖父は呆然としていた。手が震えている。
餌の代わりに釣り上げられたそれは、先ほど
までの死闘を証明するものだった。祖父はそ
れを引きちぎると海に投げ捨てた。

「ちくしよめ」

祖父も悔しがっていた。何度も堤防に叩き
つけるように「ちくしよめ」と繰り返し返す。

祖父の中にそのような熱情が残っていたこと

に驚いた。

それは、ただ魚に逃げられたということ以上のものであるように思われた。まるで体内に蓄積していたすべての悔しさが噴き出たみたいだった。祖父は念仏のようにぶつぶつ呟いて、最後に大きく痰を吐いた。

急に視界がクリアになり、祖父の顔を捉えた。皺だらけで頬のこけた顔は、はたしてこんな顔だっただろうか。堤防がわずかにくの字に曲がっていることに気がついた。目に入っているのに見えていなかったものたちが次々に飛び込んでくる。

息をしていることに意識が向いた。鼻から潮風を吸い込んで、口から出す。今までどうやって呼吸していたのか思い出せない。

黒くにごった海は、良いものも悪いものも飲み込んでいるようだった。先ほど逃げた大魚も、この海のどこかを泳いでいるのだろう。体力的にも精神的にも釣りを続けるのは不可能だった。いつも以上に時間をかけて帰り

支度を終え、牛歩みたいに堤防を進む。行きと同じように距離を置いて、祖父の背中を見守りながら歩く。

心地よい疲労感があった。客観的に見ると釣果はゼロ。でも浩一の両手には、あの力強い振動がありありと残っていた。

前を歩く祖父の背中を眺めていると、胃の上あたりがじわりと痛んだ

「ねえ」

祖父の背中に声をかけた。呼応するように近くで鳥の鳴き声がする。

「……ん」

祖父が歩みをとめて振り返った。傾きかけた陽を浴びて全身がたいだい橙に染まっている。表情は逆光になってよく見えない。

「ばあちゃんに何したん、昔」

浩一は禁忌と思われる部分に踏み込んだ。

何となく今なら許されるような気がしていた。

「……聞いてもどうもならん」

「ええけえ、教えて」

祖父はまた前を向いて一歩ずつ踏み出した。背中が左右にゆらゆら揺れる。足下でシヤリ、と何かが潰れる音がした。踏んだものを確かめようとしたとき、祖父がぽつりと言った。

「ばあちゃん……殺そうとした」

浩一ははっとして立ち止まった。親戚の言葉がよみがえってくる。隠されていた箱が開きつつあるのを感じた。祖父も歩みをとめ、互いに見つめ合う形となる。波音が大きく聞こえた。

「なんで」

祖父は一度口を開きかけたが何も発することなく、また前を向いてゆつくりとした動作で歩きはじめた。

「なんでなん」

追いかけながら浩一はもう一度訊ねた。これがラストチャンスだという思いがあった。

「あんとき」前を向いたまま祖父が言った。

「会社が潰れて、ほんで……心中しようとしたんよ。死にきれんで……ばあちゃんに大け

がさせた」

心臓がどくと跳ねた。

「この病気も……バチが当たったんじゃない」

祖父は足を引きずるように歩く。太陽がもう沈みかけている。海岸に近づくにつれて、またドブのような臭いがした。

見慣れた海岸に、見たことのないゴミが散らばっている。新しく漂着したのか、たんに目に入っていなかっただけなのかは分からない。太陽が完全に沈むと、海はまた黒く染まった。

浩一は急に笑いたなくなった。こらえきれず思わず吹き出す。堤防に佇んでいた鳥たちが、いっせいに飛び立った。祖父は首をかしげ、また前を向いて歩きはじめた。

家に着いてからも、浩一の頭は熱に浮かされたようにぼんやりしていた。テレビの内容が頭に入っていない。

あの魚はどれくらい大きかったのか。

頭の中の映像は勝手に肥大化していた。釣り逃がした魚は、一メートルをはるかに超えるサイズに成長し、悠然と泳いでいる。どこまでが現実だったのか、あるいは全部ただの夢だったのか、区別がつかない。

玄関のドアが開き、めずらしく父が残業なしで帰宅した。

「ただいま」

特に会話を交わすでもなく、手洗いをすませて食卓に着く。無言の夕食が始まった。箸がカチャカチャと食器に当たる音だけが響く。しばらくして、味噌汁を口にした祖父が箸を乱暴に置き、声を上げた。

「何じゃあ、この薄味は」

心臓がどきりとした。それはまるで数年前の焼き直しのようだった。大物を釣り逃がしたショックで体内時計がくるったのかもしれない。祖父の顔を見ると、口の横に米粒がへばりついていた。それは不吉なサインのよう
に思われた。

ただ不思議なことに、浩一にとっても今日の味噌汁は本当に味が薄いような気がしていた。

「そうですか」母がひと口味見をしてから言う。「いつもと変わらないはずなんですけどねえ」

そして、祖父に聞こえないような小声で「どうせ分からんくせに、ボケ老人が」と続けた。

その瞬間。

身体の底のほうから、泡を立てて強い感情が湧き上がってきた。ぶくぶくと抑えようのないほどに膨れて、一気に喉元までせり上がってくる。

あの魚がフラッシュバックのように脳裏に浮かんだ。

泳いでいる魚は浩一で、それを見ているのも浩一だった。背景は無^へ人島の澄んだ碧海（きかい）に変わっている。

魚が尾びれを大きく震わせると同時に、熱

を帯びた感情が唇をこじあげた。

「薄いよ、この味噌汁。僕もそう思う」

気がつくとなんな台詞が口から出ていた。

食卓はしんと静まり、父は口をぱくぱくさせていた。酸素が足りなくなったのか。その様子は餌の“ケビ”みたいに見えた。祖父も浩一を見たまま固まっていた。

「父さんは、いつもと同じで美味しいと思うけどな」

永世中立国の父は、このタイミングで母の側について家のパワーバランスを保とうとしたようだった。

「じゃあ食べんでいい！」

母は浩一のお椀をつかむと、流しに放り投げた。がしゃん、と何かが割れる音がした。家族が壊れた音だったのかもしれない。

浩一はテーブルを叩いて立ち上がった。

「もう、いらん」

「勝手にしいや！」

母が背中に向かって叫ぶのが聞こえた。浩

一がドアを強くしめたあとも、母の叫び声が階段まで響き続けた。

浩一は二階の部屋に戻って、ベッドに倒れ込んだ。心臓がどきどきしていた。自分の身体なのに、誰かに乗っ取られたようだった。一連の出来事が、昼にやっているドラマみたいにも思えた。

これから——どうなるのだろう。

蛍光灯のひもを足の親指と人差し指の間ではさんで引っ張ると、カチツと音がして豆電球が変わった。一瞬間がおとずれたように思えるが、すぐに目が慣れて天井の染みが見えてくる。

頭の奥がじんとした。睡眠薬の副作用だろうか。目が冴えているので、眠気とは違うのかも少しなかった。

ポチャン、と何かが跳ねる音がした。

新しいことが起こる予感があった。今まで表面上だけでも家族という形を保っていたのがむしろ奇跡なのだという気もした。本当は

とつくにひびわれて、あちこちが虫に食われて
いる状態だったはずだ。

火照る身体を冷ますように浩一は窓を開け
た。生ぬるい空気とともに、すべてを混ぜ込
んだ磯の香りがする。

波音が静かに、潮風を連れてくる。

浩一は、明日も釣りに行こうと決めた。

〈了〉